

アジア地域におけるイスラム教ソーシャルワーク実践

研究代表: 社会事業研究所藤岡孝志

報告: 共同研究員 松尾加奈

1 研究の概要

本研究は日本社会事業大学と淑徳大学の共同研究である「宗教とソーシャルワーク」の第2ステージであり、「イスラム教」に焦点をおきイスラム教が実施しているソーシャルワーク実践について調査記録したものである。対象国はイスラム教徒が大多数を占めるバングラデシュ・インドネシア・マレーシア及びイスラム教徒が少数派でありながら大きな影響力を持つタイ・フィリピンの5カ国である。調査方法としてはAPASWE会員のうち上記5カ国の会員校に上記テーマで調査参加者を公募した。途中平成27年12月開催の「環太平洋セミナー」で中間報告、1月末に最終報告が提出された。

2 本調査の背景について

「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」が2014年7月、国際ソーシャルワーク教育学校連盟(IASSW)、国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW)、そして国際社会福祉協議会(ICSW)の3団体合同開催のメルボルン国際会議で採択された¹。最後のセンテンスにある「この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい²」という文言を受け、アジア太平洋ソーシャルワーク学校連盟(APASWE)はメルボルン国際会議の直後の7月14-15日、「ソーシャルワークの圏域(リージョナル)定義一日ワークショップ」をオーストラリア応用心理学カレッジ(Australian College of Applied Psychology; ACAP)・メルボルンキャンパスで開催し、本研究の共同研究者である秋元樹がコーディネータの一人として、また共同研究員の松尾加奈が個別グループのファシリテーターとして参加した。ワークショップでは、宗教的・民族的背景の異なる参加者たちがアジア太平洋圏域の定義に必要な項目について議論され、「スピリチュアリティ」「宗教」「信仰」が我々の住むアジア太平洋圏域のソーシャルワーク展開定義に必要な項目であるとの提案がなされた。

¹ IASSW/IFSW/ICSW Joint World Conference on Social Work, Education, and Social Development (9-12 July 2014, Melbourne)

² 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義(確定版)」(日本ソーシャルワーク教育学校連盟)

これらの項目が提案されたのはこのワークショップが初めてでは無論無い。2010年11月に本学で開催されたソーシャルワーク定義の見直し議論以来繰り返し議題に上った項目である。アジア太平洋圏域全体をみると、この地域のソーシャルワークのキーワードとして、「スピリチュアル」「宗教」「信仰」は無視できないといっても過言ではない。

さらにソーシャルワーク定義改訂の過程で、ソーシャルワークにおける宗教の重要性についての議論も生まれた。「ソーシャルワーク専門職に対する仏教の役割・貢献」である。本学と APASWE によるコーディネートのもと、ベトナム国立ハノイ人文科学大学と淑徳大学による国際共同研究「宗教とソーシャルワーク—仏教の場合(2012-2014年)」により、仏教徒の「ソーシャルワークに替わる(alternative)機能」とソーシャルワーク専門職の協働がソーシャルワークの新たな展開を示唆するという議論が展開された。本学がコーディネートしたこれらの国際共同プロジェクトを通じ、ひとつの仮説が導かれた。

すなわち、西欧生まれのソーシャルワーク専門職がアジア太平洋圏域に伝わってきたが、ソーシャルワーク活動そのものは、それぞれの国や地域に根付いた価値・宗教・文化・伝統・多様なスピリチュアリティに基づき展開、実践されている、というものである。

繰り返すがアジア太平洋圏域には様々な宗教がある。仏教ソーシャルワークが活動している実践例の調査をコーディネートした本学は 2015 年「イスラムとソーシャルワーク実践」に焦点をあてることにした。イスラム教はソーシャルワークの領域でどのような活動を展開しているのか。仏教ソーシャルワーク活動の調査と同様に、そして仏教に対比させイスラム教が実施しているソーシャルワーク活動の実践例を調査することを目的に本研究はデザインされている。

3 目的および対象について

本研究の主目的は「イスラム教ソーシャルワーク」の実践がどのように行われているか各国の実践の事実を記録することにある。対象とする国はイスラム教徒が大多数を占めるバングラデシュ・インドネシア・マレーシア、及びイスラム教徒は少数派でありながら大きな影響力を持つタイ・フィリピンの 5 カ国を選択した。上述のとおりこの 5 カ国の APASWE 会員校、本学が実施した過去の共同研究協力者及びソーシャルワーク教育学校連盟から調査参加者を公募した。参加者にガイドラインの中で本研究の目的を大きく 3 点提示した。すなわち、

- 1) イスラム教モスクや聖職者(ustads)が行っているソーシャルワーク領域(貧困者、高齢者、児童、障がい者、HIV/AIDS 感染者、災害被災者、その他の経済的・身体的・精神的に支えが必要な人々に対する支援領域)についての実践例の調査・記録
- 2) アジア地域で同様の実践を行っている人々やこれらの実践に知的関心を寄せている人々との情報共有
- 3) 「イスラム教ソーシャルワーク」とは何か。このリサーチ及びリサーチを通じて出会う多くの人々とのネットワーク構築³

2015 年度の研究では「イスラム教ソーシャルワーク」の定義までは到達しなかったが調査対象国における様々なイスラム教ソーシャルワーク領域における実践例が報告された。またなぜイスラム教聖職者たちがソーシャルワーク領域において様々な実践を展開しているのか、その理由についてインタビューによる調査や執筆者の分析が報告された。

本研究の長期的ゴールはソーシャルワークと宗教の関連性や宗教ソーシャルワークの理論の構築においている。イスラム教徒が実践している「ソーシャルワーク⁴」活動はどのようなものがあるのか。その実践活動を知らずして西欧生まれのソーシャルワーク専門職との異同やイスラム社会における西欧ルーツのソーシャルワーク活動の困難性を議論することはできない。本研究は、各国のイスラム教徒が実践している「ソーシャルワーク」実践の内容についてその是非を問うことをせず、また各国の研究者が自国のイスラム教についてその「ソーシャルワーク」実践を記録し、コーディネータと執筆者が同じ目線の位置で、あるいは執筆者に教えてもらうという位置での共同研究遂行を心がけた。

3.1 執筆者について

本研究執筆者及び国名は以下のとおりである。

ムハマド・サマド、アンワール・ホッサイン(バングラデシュ)

アディ・ファハルディン、フスマアティ・ユスーフ、トン・ウイトノ、ロファ・ムザキール(インドネシア)

ザリナ・マット・サアド、ズルカルナイン・ハッタ (マレーシア)

³ Appendix B(2016). Islamic Social Work Practice : Experiences of Muslim Activities in Asia. Chiba, Asian Center for Social Work Research (ACSWR), Shukutoku University.

⁴ 実践者自らが自身の活動をソーシャルワークと認識していない場合もあるし、西欧ソーシャルワークの範疇ではない活動も含まれるため、ここでは「ソーシャルワーク」と括弧書きとした。

メルバ・マナポル(フィリピン)

ワンワディ・ボンポクシン(タイ)

4 研究結果の概要

上述のとおり、本研究は先行する「宗教とソーシャルワーカー—仏教の場合」から派生しており、仏教ソーシャルワークとの比較研究の側面も持つ。先行研究において、アジアでは西欧ソーシャルワークが伝播する以前より僧侶・尼僧・仏教施設が様々な「ソーシャルワーク」活動を実践していたことが報告されている。一方、イスラム教でもコーランの中で孤児、旅人や助けを必要とする人々への救済がイスラム教徒の義務として説かれている(井筒訳、p.329)。

全ての調査グループの報告にはそれぞれの国でイスラム教の「ソーシャルワーク」の実践が展開されていることが報告された。イスラム教宗教施設であるモスクは礼拝や祈りの場所としての機能にとどまらず、教育、職業訓練や生活訓練、社会活動、開発、訴訟、人々の交流や医療、緊急時の非難施設、生活再建や芸術を表現する場であり(サアド・ハッタ,p.69)、瞑想や信仰の場として、また政治的議論や教育の場としての機能(サマド,p.10)を持つ。イスラム教は信者の生活全般のフレームワークであり包括的な生活規範であり(ファハルディン、p.54)、モスクは宗教にとどまらない、いわば包括的な社会文化的なコミュニティの中心としての機能を併せ持っているのである(サアド・ハッタ)。

イスラム教の教えにある宗教税や献金、寄付金(ザカト、サダカ)によりイスラム教社会活動を支える財政の仕組みについても報告された。イスラム教徒による金銭支援、マイクロファイナンス、社会サービス、ヘルス・ケア、リハビリテーションやコミュニティ開発、エンパワメント等のソーシャルワーク活動の実践例をあげ、これらの活動は宗教税や献金により財政的に支えられていることが報告された(ファハルディン、p.34)。イスラム教のコミュニティにおいては、これら宗教的な慈善献金を集めるシステムがソーシャルワーク活動の資金源になっている。

その他にも、モスクによる「ソーシャルワーク」活動、孤児やストリートチルドレン等の児童支援施設、精神障がい者施設、薬物依存者療養施設や高齢者施設や、シングルマザー支援、被災者支援等を実践する NGO の活動、イスラム教徒で支援を必要とする家族に介入する公務員であるソーシャルワーカーの活動など、イスラム教国における様々な実践例が各国から報告された。いずれも西欧にルーツをもつソーシャルワーク専門職がターゲットにしている領域での「要支援者」でもある。ターゲットにしている領域について、イスラム教徒によるソーシャルワーク活動と西欧ルーツのソーシャルワーク専門職の活動

は同じ領域が含まれる。一方で、イスラム教徒がカバーしないジェンダーやターミナルケアについては公的ソーシャルワーカーや他の人道支援 NGO がカバーしている例も報告された(ポンポクシン、p.114)。

についてもまたすべてのソーシャルワーク実践は神(アッラー)の意志により社会への責任として実施されていることも報告された。今回の研究は極めてプリミティブでありながらも実証データの記録である。イスラム教のソーシャルワーク実践は人々のライフスタイルに寄り添っており、西欧で生まれ育った「ソーシャルワーク」と似た実践も報告されている。一方でイスラム教のソーシャルワーク実践は西欧とは異なる価値観(例えば社会正義)を持っており、また人々に西欧生まれのソーシャルワークと同じとは認識されていない。では「ソーシャルワーク」とは何か。本研究によりイスラム教をはじめとする様々な宗教をバックグラウンドに持つソーシャルワーク実践を理論化しその構成要素を抽出することにより「ソーシャルワーク」とは何かを明らかにしていくことの重要性が明らかになった。

(2016). Islamic Social Work Practice : Experiences of Muslim Activities in Asia. Chiba, Asian Center for Social Work Research (ACSWR), Shukutoku University.